



Title	「癒し」の民俗学的研究
Author(s)	小松, 和彦
Citation	臨床哲学ニューズレター. 1997, 1, p. 87-90
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/81716
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「癒し」の民俗学的研究

小松和彦

私の研究の立場である民俗学、文化人類学という領域の中で「癒し」というものがどういう形で目に見えてくるのかを考えてみたい。

臨床哲学とは、人間の生きている現場、すなわち研究室の中ではなく、研究を立ち上げる場、相互主観的な場を我々がどのようにとらえるのか、そしてその中で哲学的問題をどのように考えていくのか、といった営みだと思われる。それでは、人類学としてどのような現場を想定できるのだろうか。人間は思考する場合に主観的基準をたくさん持っており、その基準を使い分けながら人とつながり合っている。そして相手もそのような主観によって構成されていて、それぞれがふつかりあって世界をつくりあげていく。客観というものがあるのではなく、主観と主観との関係の中で社会的世界がつくられる。アルフレッド・シュッツは『現象学的社会学』の中で我々の社会的世界というものを次のように表現している。「集団の中で生まれ育った者ならば誰でも、先祖や教師や権威者から受け渡された既成の標準化された文化パターンを、その社会的世界で通常生じるあらゆる状況に適合する疑いなく確かな指針として受け入れる。」文化パターンは文化が変わると自明ではなくなる。また、文化パターンは重層化している。臨床哲学、人類学、社会学、民俗学はそれがどのように重層化しているかを探る学問と言える。重層化している文化パターンにはもちろん優劣関係、並列関係もある。優越しているものは何か、従属しているものは何か、並列しているものは何かを探ることも相互主観的世界を見ていく上で必要になってくる。文化パターンは「世間」という日常の言葉で表現できる。学者の世間、家族という世間、大学という世間、様々な世間が錯綜して存在している。日本の社会は、世間という型で形成されている集合や集団が錯綜して存在している。その中身は、西洋の人文社会科学では完全にはとらえきれない。「世間」は「現実」という言葉で言い換えられるかもしれない。多様な現実、主観を我々は内部に抱え持っている。そして個人の現実と他者の現実が何かを共有し合

ったり、排除したり、優越した環境をつくりだしたりする。このことは、多重あるいは多様な人格という表現を用いて語ることもできる。社会が複雑になり、世間が複雑になり、我々が依拠している文化パターンが複雑になってくると、人間はその複雑な現実を多様に使い分けながら生きていかなければならない。しかし、その使い分けができない人もいる。そうした人の中には、人格のコントロールができなくなって破綻し、精神医学的な症状を呈する人もいるかもしれない。

社会学者、民俗学者、倫理学者は、目に見える社会生活の現実を明らかにするが、「癒し」という言葉で関わってくる領域は、文化パターンないしは相互主観的な関係の中でもとくに「霊的現実」と呼ばれるものである。ある人はこれを排除するかもしれないし、あるいは排除していると思っているかもしれない。しかし世の中には、霊的な現実属するとしか考えられないような行動が数多く存在する。

私の調査地のトラック諸島では戦後50年たっても日本から慰霊団がやってくる。海底に沈んだ骨を引き上げて茶毘にふし、元の部下や遺族が慰霊をする。彼らには50年たっても慰霊されていないという思いがあるし、私もその行為を見ると感動する。その場合、私にもそれに感動するような文化パターンが組み込まれている。その領域はその人が霊的なものを信じているかどうかは別にしても、少なくとも「霊」という言葉を使って表現しなければならないものである。このことは、若い人の間ではやっている「ジャンボジェットの怪」という噂話にも結びついている。サイパンに遊びに行った若者がサイパンは日本軍の玉砕の地であることを知り、その帰りのジャンボジェットの中で女性の後ろに若い兵隊の霊がついていると言いだす（もっとも、霊は若い女性にはつくが、おばあさんにはつかないということだが）。こうした話が成り立つ背後には、50年たっても兵隊の霊がさまよっているかもしれないという人々の思いがあるのではないだろうか。

このように意識的・無意識的なものを含めて霊的現実を考えていくときに浮かび上がってくるくるものが、宗教人類学的な研究領域である。宗教人類学的な臨床の現場というのは、目に見えない霊的な出来事、あるいは霊と名づけられるようなものを想定して現実を説明していく。または、そのような現実を生

きていく人たちの領域である。簡単に言えば、「神の力」で病気の治療を行うというような現場である。その現場には私が信じようが信じまいが、そこに神の力で治すという人がいて、そこで治してもらおうという患者がいる。その両者が会って、まさに相互主観的な世界を構成している。うまく世界を構成することのできる宗教者（占い師）のまわりにはカルトができる。ここで大事なことは、患者と宗教者が協同して一つの現実を生きようとするところである。この関係をつくるにあたっては現実的な事件が必要となる。それは病気であったり、自分の悩みであったりするが、それ以外にも色々な事柄が契機となって、その事件をいかに説明するかということで相互主観的な関係が構成される。

韓国のムーダン（「巫堂」：シャーマン）の儀礼ゼスック（病気の快癒の祈りや神霊の託宣と死霊の意志を受け伝えをするシャーマニズムの儀礼）がその例である。全羅南道の光州市では3～400人のムーダンが活動している。ここでは宗教者と患者の二者の関係で世界がつくりあげられる。ムーダンが患者の話聞き、患者に物語を提供する。その物語は霊的なものを介在しており、精神分析医の治療とは異なっている。悪霊や先祖の霊がたたっているというようなことを言説の中に入れながら、見えない世界を説明していく。ムーダンは、自分の持っている霊的な装置の中で、現実や文化パターンに従いながら、一人一人の患者にそれぞれの苦しみなどに対応する物語を提供していく。そして患者もそれを受け入れたとき、一つの世界ができる。それを受け入れるということは、自分の病気の原因がわかり、どうすればその病気が治るかということを受け入れることでもある。その物語を共有していくプロセスが共感関係をつくっていく。我々から見ればばかばかしいことであるかもしれないが、少なくともその世界に入っている人間にとっては、何らかの精神的な変化が生じている。我々がこのような世界を壊すことは簡単であるが、実際にその世界に入ってみると、ある意味で居心地のいい面もなくはない。シャーマンは社会によってある程度容認されている霊的世界を前提にした治療をしていたのだが、それが近代化の中で否定されてくると、精神分析医のように、霊的なものを使わないで個人の歴史の中で物語をつくって説明するやり方によって変わったのかもしれない。

このような現場から見えてくるのは、宗教人類学、宗教民俗学、宗教社会学

の問題であるが、それは同時に、哲学、臨床哲学、臨床人間科学の領域と交錯する問題としてもとらえなおすことができるものである。

（記録：森芳周）